

Cliché について

岡田六男

そのアクセント符号からも判断できるように cliché はフランス語から英語に入ってきた言葉であって、語学上では、古臭い、新鮮味に欠けた語句を意味するということは、いまさら説明することもあるまい。外国人が物した英語のハンドブックなどには、きまって、hackneyed phrase とか wornout expression とかとか表現こそ違いますが、陳腐な、言い古された語句として、いくつかの例を並べて、「これらの表現は避けなければならない」と書いてある。最近では cliché という言葉の方が多く用いられるようである。

英語を歴史的に研究する場合に、final court of appeal として最高の根拠となる辞典とみなされている、かの 12 巻からなる Oxford の NED (New English Dictionary) の別冊の Supplement 中に、1892 年に使われたこの特殊の意味における cliché の例があげてある。C の部が編集された後に、脱落していることが発見されたものらしい。NED に基いて編集された SOD, COD, POD にはもちろんこの意味での cliché は入れている。

英米人が書いた参考書ばかりでなく、日本人が書いたもの——特に実務英語としての書簡文の書き方を教えた参考書——でも、your esteemed letter (貴簡) Enclosed herewith is . . . , Enclosed please find . . . , Thanking you in advance 等々の例をあげて、cliché 的の表現は避くべきものとしている。

英語を国語としていない日本人の場合は違う。英米文学の小説や随筆を読んで、やっと覚えたばかりの語句を、外国人の参考書の中で、cliché だ

から避くべきだと忠告されるのは、全く味気ないものだ。日本人は、国会議員連から町のみいちゃん、はあちゃんに至るまで、日常会話に、「腐っても鯛(たい)」「花よりだんご」など、いわゆるいろはがるた式の諺を口にする習慣がある。講談や落語にも、日本式 clichés がしばしば聞かれる。また戦前派の人々は、漢文で習った、「五十歩百歩」(孟子)「千万人といえども吾行かん」(孟子)「朝三暮四」(列子・荘子)など、現代の若い人達にはピンとこない語句を平気で使うことがある。こうした風習というか、国民性というか、一種の mental laziness といったような表現に慣れた日本人は、英語を習う場合、余り cliché を気にしない。中には、駄じゃれをいうことに慣れて、cliché を一つの clincher (止めを刺す言葉)として使うことを得意とする人さえもある。しかし何んと弁解してみても、cliché と称せられる成句には新鮮味がないということだけは否定できない。

cliché は使用度数を統計的に計算して定めたものではない。古くから使われているという理由ばかりでもない。古くからある言葉という意味なら、英詩の父と呼ばれるチョーサー時代、即ち 14 世紀頃すでに、さかんに使われ、現代でも米国では、日常会話に用いられている I guess という表現や、16 世紀のシェークスピア時代からの I thank you などが cliché でなくて何んだらう。しかもこれらの表現を含めた日常の英語は cliché とはいわない。

cliché に関する辞典は、余りお目にかからない。Eric Partridge の A Dictionary of Clichés 位のものだ。普通の辞典には沢山の成句なるものが出ているが、一々これは cliché だという断り書きはしてない。前述の Oxford 辞典をはじめとして、研究社の英和辞典や英語イディオム辞典、戦前に北星堂から出た Lyell の熟語英英辞典など多くの辞書では、cliché 扱いをしていない。Whitford と Dixson の共著 “Handbook of

Cliché について

American Idioms and Idiomatic Usage”にも約 4,500 語の成句をその用例と共に出しているが、cliché として断っているものは一つもない。ただ Webster の第三版や英作文に重宝がられている開拓社の英英辞典には、いわゆる cliché としての極印を押されている conspicuous by its absence/has the defects of his qualities (長所に伴う短所)等の成句は余り見えない。

Cliché に関する参考書のうちで主なものは Fowler の MEU (Modern English Usage) と Evans の A Dictionary of Contemporary American Usage であろう。前者はその初版で、堂々 31 頁に亘る Technical Terms の項に cliché に言及すると共に、Hackneyed Phrases の項に一寸した list を掲げているが、最近出た改版では、数欄に亘る cliché の別項も設けている。後者(即ち Evans の American Usage)は 567 頁位の辞典の形式の本だが、アメリカ語法を主とした同意語の解説や文法的解釈を盛り沢山に提供しているばかりでなく、400 程の語句を挙げています。その語句のほとんど全部が編者のいわゆる cliché であって、なかには、ながながと故事来歴を述べているものもある。一々、この句は、「cliché である」とか「すでに cliché になっている」とかと付けたして、使用しないように忠告している。避けてほしい語句なら、何も故事来歴まで述べる必要もなさそうに思われる。wishful thinking (希望的観測)までも槍玉にあげて「30 年位前から使われているが、すでに cliché になっている」といっているかと思うと、“fight tooth and nail”(ラテン語の with claws and beak を意味する句をもじったもの)の所では、「この句は、400 年もことわざのように用いられていたが、100 年程前から cliché となっている」と、まるで、科学的根拠に基いたようなことをいっている。しかし Evans は、バイブルからきた“the salt of the earth”(地の塩・社会の健全分子)という語句の中で述べているように、“All it needs is rest”

(しばらく開店休業状態におくべきだ)などと、付け加えている。要するに、いかに新鮮味に欠けているといっても、 cliché は着物の柄みみたいなもので、今の流行はすぐすたれても、何十年も前の柄が、また、はやってくることもあり得ることに類似している。思い出すが、数年前、学校の研究室で若い外人教師二人(一人は英人、他の一人はカナダ人)と茶飲み話をしている時、 cups that cheer but not inebriate という「茶」を意味する clichés 中の cliché に言及したことがあるが、驚いたことに二人ともそんな表現は聞いたことがないと涼しい顔をしていた。なるほど、ながい間 cliché として日常会話でタブー扱いのようにされているうちに、若い者には、もはや、陳腐ではなくなり、全く耳新しい語句になってしまうのだということを感じた。又 Evans は “raining cats and dogs” のところで、この成句は 1738 年に Swift が今日でいう cliché として彼の “A Complete Collection of Genteel and Ingenious Conversations” の中に list していると述べて、“It is time to seek a fresher, newer image” と結んでいる。別なところでも、Swift の list なるものに触れているが、恐らく、Evans の cliché 論の根拠の一つとなっているのだろう。

この外、一読の価値のあるのは MEU の second edition を編集した Sir Ernest Gowers 著 The Complete Plain Words (209 頁) であろう。これは辞典ではないが、極めて興味深く読ませる Fowler ばりの参考書である。ともすれば padding clichés (不必要なそう入句として用いられる極り文句) を使い勝ちの official writing の通弊を含む, officialese に関して、数多の例を挙げて指摘し、お役所用語のありかたを説いている。はやり言葉が濫用されて cliché 的存在になり易い例として、breakdown (内訳), repercussion, reaction, target, sabotage, anticipate, implement, liquidation, proposition utilize 等々について、これを例証し、padding clichés としては、in this connection (これに関して), for your informa-

Cliché について

tion (ご参考までに), on a.....basis 等の例を指摘している。

以上で、英米人の cliché に対する態度が、いかにも、Japanese English (こんな表現はどの辞典にもないが、英語を国語としていない日本人の多数が使う変てこな英語を軽蔑して用いる表現) に対するそれに似ていることが分ると思う。しかし吾々英語を研究する者は、cliché と称する語句に、聞き飽き、見飽き、使い飽き、そろそろ鼻につきはじめたことを意識した時にはじめて避けるようにしても遅くはない。

cliché の中で最も普通なのは、as good as gold のように as.....as の simile (明喩、特に、頭韻的なものが多い。COD の as の項には、60 位よく見受ける表現が並べてあるが、そのうち約 20 は alliterative phrase である。blind as a bat から weak as water に至るまであげている。中には rhyme する剽軽な言い回し、snug as a bug in a rug (気持ちよく納まり返っている) などもある。

何んといっても cliché の大部分は引用句と見てよい。ギリシャ・ローマの神話、バイブル、イソップ物語、シェークスピアの劇、その他多くの英国の詩人や小説家などからの引用句で cliché となっているものは無数に及ぶ。

紙数に限りがあるから、ここでは聖書やシェークスピアからの引用を主として、吾々日本人に特に興味のあるものを拾って見ることにする。

まずバイブルから始めよう。“I am Alpha and Omega, the beginning and the end, the first and the last” (Rev. 22. 13) これをもじって from alpha to omega (「ピンからキリまで」この日本の表現自体がポルトガル語の一と十という言葉の訛ったものから出来たものとされている) などと用いられる。

“I am made all things to all men” (1 Cor. 1. 27) これは、よく He is all things to all men. (八方美人) などとして使われることがある。

“In the multitude of counsellors there is safety” (箴言 11.22 助言者が多ければ安全である) これは、間違った引用をして There is safety in numbers (人数が多ければ安全だ、即ち、グループで異性との交際などしているうちは安全だ、また横断道路を渡る時でも人数が多ければ、一人で渡るより安全だという意味などを表わす時に用いられる。

“Thou art weighed in the balances, and art found wanting.” (Dan. 5. 27 あなたがはかりで量られて、その量の足りないことが分った) これは昔の漢文口調でいうと、「鼎(かなえ)の軽重を問われた」に相当する成句である。

この外、the salt of the earth (Matt. 5:13); Touch not, taste not, handle not (コロサイ人への手紙 2, 21 からだが、これをもじって、有名な日光の三猿 “Three Monkeys” を説明する場合、Hear not, speak not, see not という人もある、); labor of love (「愛の労苦」とは報酬を望まずに好意でする仕事のこと。“I am doing it as a labor of love” などという、); we walk by faith, not by sight (見えるものによらないで、信仰によって歩いている、); not greedy of filthy lucre (金に淡白 filthy lucre “ぜに” やラベレーからの訳語 Coin is the sinews of war の the sinews of war 「資金」などもよく cliché として引用されている); a thorn in the flesh 「肉体に一つのとげ」とは苦痛、苦勞の種、vanity of vanities; all is vanity (空の空なるかな、すべて空なり、The end is not yet (Matt. 24:6) 「まだ終りではない、hope against hope (空頼みをする) 等々、並べれば切りがない。これらはすべて cliché 扱いにされている。

次にシェークスピアからの引用句だが、これもまたいくら挙げても切りがない程ある。

「ハムレット」からの“to be or not be” は To buy or not to buy; that was the question over which I wavered などと、もじって使った

Cliché について

りするが、吾々日本人にも鼻につく句である。There is the rub (それが厄介なのだ)/The time is out of joint/Brevity is the soul of wit/Frailty, thy name is woman !/Consummation devoutly to be wished/the observed of all observers (衆目の的)/suit the action to the word (そう言いながら動作をする)/is more honored in the breach than in the observance (習慣などは守るより破った方が名誉になる) 等は皆吾々日本人にもなじみ深い「ハムレット」からの引用句である。山・山・山などと同じ言葉を三つ続ける語法も、「ハムレット」の中で、ポロニアスに「何をお読みですか」と問われて、ハムレットが“words, words, words”と答えるあのせりふを思い出させる。

「リア王」から more sinned against than sinning (悪事をしたというよりむしろ自分がひどい目にあう) や every inch a king (申し分のない典型的の国王) などがある。

Wear one's heart upon one's sleeves (感じることを包まず話す) や I am nothing, if not critical (口の悪いのが私の取柄) や a foregone conclusion (経験ずみのこと) などの cliché 的の句は「オセロ」から来ている。

「マクベス」からは、make assurance double sure (念には念を入れ、これは時々引用を間違って doubly sure となっていることもある) the be-all and the end-all here (Webster 三版には The be-all and the end-all of the detective story is to conceal the identity of the criminal という例がロンドン・タイムズの Literary Supplement から引用されている) Cowards die many times before their deaths (many の代りに a hundred times を用いることがある) や what's done is done (これは what's said is said and cannot be unsaid などと、もじって使われることがある) 等があげられる。

「ベニスの商人」の中の *all that glitters is not gold* や *A Daniel come to judgement* (名裁判官ダニエル様の再来だ。これは当を得た裁決が出た時などの極り文句) とか「ロミオとジュリエット」の *whats' in a name?* (名が何だ。これについては後述する) は余りにもよく知られている cliché だ。テンペストからは *suffer a sea change* (変貌も甚だしい) などが有名。「ロミオとジュリエット」の *prologue* にある *a pair of star-crossed lovers* (二人の幸薄い恋人) と「お気に召すまま」*Epilogue* の中の *Good wine needs no bush* (良酒には看板はいらない) を引合いに出して、シェークスピアからの引用を切り上げる。「マクベス」の五幕五場に城にひしめく敵の大軍を見てマクベスが “*The cry is still, They come! our castle's strength will laugh a siege to scorn.*” というせりふがあるが、この *The cry is still they come* は人(物)が次から次へとひっきりなしに現われる状態を形容する時に用いられる cliché である。シェークスピアからの引用句は数えきれない程あるが、手許にある *Bartlett* の “*Familiar Quotations*” にはシェークスピアだけでも 121 頁に亘っている。

インソップからの引用句としては、*Bartlett* の第 10 版には約 54 の引用句が出ている。“おおかみが来た” と、面白半分の人をおどしていた少年羊飼が、最後にほんものが出てきて羊を食べられてしまったという物語にある *cry wolf* (虚報を伝える) をはじめ、「きつねとぶどう」の物語の *sour grapes* (すっぱいぶどうとは負け惜しみを言うの意) や、ねずみ達が相談のあげく、*Who is going to bell the cat?* (猫の首に鈴をつける、即ち難局に当るのは誰)、*団結は力だ* (*Union gives strength; United, we are strong*) を教えるまき束の話、*Slow and steady wins the race* という兎と亀の物語、*One man's meat is another man's poison* という教訓を与える「ろばときりぎりす」の物語、*Look before you leap* (ころばぬ

Cliché について

先のつえということわざを教える「きつねとやぎ」の物語など沢山ある。

「大山鳴動してねずみ一匹」に当る The Mountain in Labor という物語もイソップの寓話の中にある。

英米人はことわざというものをわれわれ日本人ほど常套の表現として用いないようだ。彼等にとってことわざは多くの場合、cliché である。English Proverbs という 740 頁に及ぶ大きな dictionary があるが、イギリスの最初のことわざ集は 1560 年の John Heywood が集めたものとされている。この中には、Rome was not built in one day (これはセルバンテスの「ドンキホーテ」からの引用句にもあるが、そこでは in a day となっている)、Enough is as good as a feast (満腹はごちそうも同様)、This hit the nail on the head (ずばり図星を指した)、A new broom sweeps clean (新任者は仕事ぶりがよい)、Beggars must not be choosers (物もらいにえり好みは禁物)、Haste makes waste (急がば回れ)、Love me, love my dog (私を愛する者は私の犬も愛するだろうという思想はわが坊主憎けりゃけさまで憎いとは正に逆の思想だ)、To set the cart before the horse (本末を転倒する) To rob Peter and pay Paul (エドワード六世の時代にウエストミンスターのセントピーター寺院の土地を提供して、ロンドンのセントポール寺院の修理に当てたという故事から出た「一方から借りて他方に返す」という意味の cliché) などがその主なものである。

次に数字に関係ある cliché 的語句を順序を追っていくつか挙げて見よう。To take care of number one (自分の事ばかり注意する) One swallow does not make summer (この諺は、「桐一葉落ちて天下の秋を知る」とは対しよ的な表現である) To have one foot in the grave (墓穴に片足をつっこんでいる) Once bit, twice shy (あつものに懲りてなますを吹く) An old man is twice a child これはシェークスピアも引用されている諺。Two heads are better than one (三人寄ればもんじゅの知恵)

Two of a trade can never agree (商売がたきは折合いの悪いもの)
Three removes are as bad as a fire (引っ越しを三度やると火事にあっ
たも同様とはフランクリンからの引用句) 四と五を飛ばして六に移ると、
五十歩百歩に当る Six of one and half a dozen of the other / much of
a muchness がある。To be at sixes and sevens / in confusion (混乱
している) Dressed up to the nines (盛装をこらして) At the eleventh
hour (聖書にある語句で、最後の機会に、きわどい時にという意味の成
句) sweet seventeen 「鬼も十八、番茶も出花」に当る表現) To talk
nineteen to the dozen (のべつ幕なしにしゃべる。まくし立てる) Three-
score (60) and ten とは聖書の文句で人の寿 70 という意味) a hundred
and one や a thousand and one は The Thousand and One Nights
(アラビヤ物語千夜一夜をもじった表現で、無数という意味) 数字に関
連した cliché に Half the battle というのがある。Youth is half the
battle (青春の鋭気はそれだけですでに成功の半ば) などと用いられる一
種の cliché 的表現であるが、日本語にも、田植がすめば、収穫の半分は
保証されたも同様という意味の「植付半作」という成句がある。

頻度何パーセントからといった具合に、一定の基準によって cliché が
生れたものでないことは前述の通りである。人にはそれぞれ好き嫌いとか、
古きに対するノスタルジアとかいったものがあるから、 cliché に対しても、
個々の見方、考え方が違うのは当然である。Fowler の MEU の Hack-
neyed Phrases の中に挙げてある約 50 の clichés ですら、これ等を今で
も平気で用いている英米人もある。引用句に journalese や vogue words
(流行語) を加えれば cliché の数は何百に及ぶわけだ。おなじみの hop,
step and jump は別として、に関連する三つの異なる語を並べて用いる副
詞句であって、すでに cliché の中に入っている語句に lock, stock and
barrel と hook, line and sinker というのがある。前者は昔の flint lock

Cliché について

(火打ち石銃)の三つの主な部分から成る “completely” (一切合財)を意味する phrase で (Ancient Japan borrowed the civilization of China lock, stock and barrel), 後者も、釣りの用具からこれをもじった同じような意味の副詞句である。bag and baggage もこれに類似した句である。Bag and baggage のように二つずつ組んで用いられる表現は、Siamese twins などと呼ばれることもあるが、part and parcel, to all intents and purposes, over and above, ways and means, sum and substance, safe and sound, time and tide 等の stock phrase, も、これをらん用すると clichés と見なされる。もし He is a valuable asset/He was anathema to the moderates (彼は穩健派にはきらわれ者)/He has a flair for music/ the asset, anathema, flair 等のはやり言葉までも cliché の範ちゅうに入れられるとすると、吾々戦前派が苦勞して覚えた語句の中で clichés の占める割合はかなり大きいと言わなければならない。今日ベトナム戦争に関連してよく使われている段階的拡大を意味する escalation などののはやり言葉にしても、格下げされて cliché の仲間入りをする時代が遠からず来るかも知れない。今日の vogue word は明日の cliché という運命かも知れない。

最後にいくつかの cliché をあげ、これらについての筆者の思い出を述べて見よう。

Like the curate's egg, it is good in parts これは玉石混淆(こう)を意味する cliché だが、Webster の三版や開拓社の英英辞典には、さすがに古臭いということを出ていない。Brewer の “Dictionary of Phrase and Fable” の改訂版には、ある牧師さんが朝食に出た少し悪くなった卵を評して所々いい部分があるといったという話から生れた表現だと説明してある。戦前といっても、昭和五年頃 “Current of the World” という日本の英語雑誌の英文和訳の問題の中にこの成句が出ていたことがあるが、当

時としては日本人には比較的珍しい表現だった。丁度その頃、北星堂では Lyell 氏が熟語辞典を編さん中だったので、氏の友人（日本人）がこの phrase の意味を質したところ、早速ライエル氏はそれを辞典に採用して、彼独得の imaginary conversation の形式で用例を示している。このいきさつを筆者は聞いて知っている。

Like Oliver Twist, I ask for more これは、もっと下さいと物を要求する時使われる cliché. いうまでもなく Charles Dickens の小説 “Oliver Twist” の主人公少年オリバーが、がつがつして、かゆのお代りを乞う場面から生れた表現だが、思い出すのは、今は故人だが明治、大正時代に英文記者として活躍した山県五十雄氏のことだ。彼がマードックの日本歴史の手伝いをして、日本外史などを英訳して史料を提供した頃のことだ。彼が徹夜までして書き上げ、毎日数十頁の翻訳を渡すと、マードックはそれを数頁か数行に短縮し、Like Oliver Twist, I am asking for more と言って引っ張りなしに催促するので、やり切れなかった、と筆者に述懐されたことがある。

Once in a blue moon これは once in a while という意味の時々耳にする成句だ。大気中のほこりのため月が青く見える現象があるので blue moon という言葉ができたということだ。かつて The Moon was Blue という映画があった。日本語は「月は青かった」となっていたと記憶する。劇にもなったそうだが題名は少し違っていただけ。とにかく、成句 once in a blue moon を知らない者には、一寸ロマンチックに聞える日本語の題名からだけではこの喜劇映画を想像することは無理だったようだ。

What's in a name? (名が何んだ) これは前述のシェークスピアの “Romeo and Juliet” からの有名な引用句だが、ジュリエットがロミオに向って「名がなんですよ、バラというものは、どんな名でそれを呼ぼうと、

Chlicé について

いいかおりに変りはないでしょう」というせりふからきた表現だ。あの場面ではロミオという名でさえないけれどもどんな名にしようと、あなたのすばらしさには変りがないというジュリエットの心情を表わしたものだが、この成句は名称を変えたがる傾向に抵抗を感じて用いることが多いようだ。終戦直後、今の Japan Times 紙（当時は Nippon Times）がこの句を題にして、名称の変更を行うのは意味なしとして論評した社説を一回ならず掲げたことがある。その矢先、突如として同紙はその名を Nippon Times から Japan Times に変更するというを紙上に公表した。同紙の論説を読んでいた者で、この広告を見て抵抗を感じたのは筆者ばかりではなかったであろう。もっとも、同紙は戦前に Japan Times だったのだから、もとに戻しただけのことだと言えば、納得できないわけでもなかった。

Straight from the horse's mouth この「確かな筋から」というスラング的の句は今日でこそほとんど多くの辞典に顔を出すようになったが終戦当時は大抵の字引には出ていなかった。筆者のある友人で、この句に度々遭遇するが、はっきりした意味がつかめなくて残念がっている人がいた。当時手許の辞典にも見えないし、筆者も満足な回答を与えることは出来なかった。たまたま彼が通訳事務の関係で、当時横浜の米国進駐軍の輸送司令部を訪れ、Lt. Colonel Lyon という人に会った際、この phrase の意味を質して、やっと年来の疑問が解けたわけだ。喜んだ彼は筆者にも早速その事を伝えてくれたので「それは何よりでした。馬の口ならぬライオンの口から聞いたとあっては、それこそ確実な情報でしたね」と笑ったことがある。

ちなみに Webster 第三版には straight の項でなく、horse の項に“from the horse's mouth”として出ている。おそらく Direct from the horse's mouth などということがあからずからあるからであろう。Evans はこの cliché

に関して “It derives from estimating the age of a horse by examining its teeth. No matter what the horse trader declared the animal’s age to be, the condition of its teeth furnished an accurate guide for the knowing.” と説明している。この説明によると、語源的には Don’t look a gift horse in the mouth (馬は齒で年齢がわかるるところから、「もらった馬の口の中を見るな」とは、もらいもののあらを捜すなという cliché 的の諺) に関連があるように見えるが、“American Thesaurus of Slang” にあるように Turf, 即ち競馬に関連して、馬の口から直接に inside tip (内部の情報) をもらうということを想像させるような分類の仕方も、如何にもしゃれ気があって面白い。

Imitation is the sincerest form of flattery これは模倣を正当化するような場合によく使われる cliché である。Bartlett の引用句辞典には C.C. Colton (1780-1832) の “The Lacon” からの引用句としてあるが、sincerest flattery としてあって、“form of” はない。しかし今日、実際には form of を入れて用いられているようだ。“Japan Times” 紙に転載されている Bennett Cerf の Try and Stop Me の欄に出ていた joke に次のようなのがあった。ある父親が近所の子供の切手収集をまねている息子に「なぜそんなことまで人のまねをしなければいけないのか」と尋ねると、息子は、すかさず、“Imitation is the sincerest form of philately [f. laeteli]” と答えたという英米人には珍しい punning joke (地口) が出ていたのを思いだす。philately は stamp-collecting のことだ。

今一つの cliché の思い出は a name to conjure with (じゅ文に用いるほど魅力に富んだ名) についてである。劇や映画で有名な松竹の全盛時代のことである。ある在日英国人が松竹についての記事を筆者たちが関係しているある英文雑誌に寄稿したことがある。書き出しが Shochiku is a name to be conjured with となっていた。さては勘違いしたなと思った

Chlicé について

から, “to conjure with とすべきではないかと注意したところ, 面子にこだわって, He is to be reckoned with というではないか, どちらでも同じことだろうと言い張って, なかなか譲ろうとしなかった。すかさず筆者は This is a nice pen to write with とか堅くいえば with which to write とかであって, a nice pen to be written with ではないだろうとやり返したら, やっと to conjure with と書き直したいきさつがある。又 NHK がかつて Paul Ehrlich の伝記をアメリカのテレビ映画で紹介したことがある。そのなかでこのドイツの細菌学者がサルバルサン(Salvarsan) 俗称 606 号の発見に成功する場面があったが, 彼が 606 号を It is a number to conjure with だといったように記憶している。